

2020/09/28

TOP コレクション 琉球弧の写真

TOP Collection: Photography in the Ryukyu Islands

2020年9月29日(火) - 11月23日(月・祝)



比嘉康雄《本土集団就職 那覇港》
〈生まれ島・沖縄〉より 1970年
ゼラチン・シルバー・プリント
東京都写真美術館蔵

展覧会概要

東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団では、Tokyo Tokyo FESTIVALの一環として、「TOP コレクション 琉球弧の写真」展を実施いたします。

本展では、「琉球弧の写真」と題し、35,000点を超える当館コレクションから、新規収蔵作品を中心に、沖縄を代表する7名の写真家（山田實、比嘉康雄、平良孝七、伊志嶺隆、平敷兼七、比嘉豊光、石川真生）の多種多様な写真表現を紹介します。

沖縄は、その温暖な気候や風土、古来からの歴史を背景に、独自の文化を育んできました。本展出品作品の多くは、1960年代から70年代の沖縄を撮影したものです。市井の人々の暮らしや、大きなうねりとなった復帰運動、古くから各地に伝わる祭祀などを写した作品は、それぞれの写真家にとって、キャリア初期の代表作となっています。

沖縄に暮らし、沖縄にレンズを向けた7名の写真家の作品には、沖縄のみならず、琉球弧（奄美群島から八重山列島にかけて弧状に連なる島々）全体を見据えたまなざしがあり、様々な角度から、この土地固有の豊かさと同時に、沖縄が直面する困難を写し出しています。

本展はこれまで沖縄県外の公立美術館で紹介されることが少なかった、沖縄を代表する写真家の作品を網羅的に紹介する初の展覧会です。

本展のみどころ

当館初の試みとなる、沖縄写真のみで構成された TOP コレクション展

本展は、これまで沖縄県外の公立美術館で紹介されることが少なかった、沖縄を代表する写真家の作品を網羅的に紹介する展覧会であり、1950年代以降の沖縄写真のみで構成された、当館では初の試みとなる展覧会です。本展は、平成26年度から平成31年度にかけて長期的に作品収集を行い、この度「TOPコレクション展」として、はじめて紹介する機会となっています。

なお、本展は名護市所蔵の平良孝七作品をこれらに加えて構成しています。

沖縄の写真家がみつめる「生まれ島」

本展の出品作家は、沖縄を代表する7名の写真家です。本展の作品には、沖縄から想起される、まばゆい光に照らし出される海や空の風景だけではなく、日本復帰に向けて揺れ動く沖縄で日々を懸命に生きる人々の姿や、琉球弧の島々に刻まれた陰の部分まで、様々な角度から、異なる背景をもつ作家自身の「生まれ島」である沖縄が写されています。

沖縄の写真家による、日常に息づく沖縄独自の歴史や豊かな文化を伝える206点にご注目ください。

出品作家と出品点数

山田 實 | Yamada Minoru [30点]

比嘉 康雄 | Higa Yasuo [34点]

平良 孝七 | Taira Koshichi [22点]

伊志嶺 隆 | Ishimine Takashi [20点]

平敷 兼七 | Heshiki Kenshichi [40点]

比嘉 豊光 | Higa Toyomitsu [40点]

石川 真生 | Ishikawa Mao [20点]

合計 206 点

主な出品作品

山田 實 | Yamada Minoru [1918–2017]



山田實

《手をつないで 糸満漁港》

1960年 ゼラチン・シルバー・プリント

東京都写真美術館蔵

“私が撮影を始めた1950年代、土門拳氏の写真集『筑豊のこどもたち』に大きく影響を受けた。その写真集は、誰もが親しみをもてる写真集にしたいという土門氏の考えで、当時百円で発売されたザラ紙印刷の写真集だった。”

池宮城拓「沖縄のこどもたちへ」山田實『こどもたちのオキナワ 1955–1965』池宮商会、2002年、82頁より一部抜粋

塩田で働く少女や漁師の父親に手を引かれる幼児、帰宅途中の小学生など、写真集の題名が端的に指し示すように、被写体は沖縄各地の子供たちだ。長身の山田だが、ほとんどの写真でカメラは子供たちの視線と同じ高さで構えられ、撮影のために山田が屈んでいる様子が眼に浮かぶ。子供たちはレンズを向けられた喜びと山田の仕草に親しみを覚えたのか、一様に笑みを浮かべている

子供たちの姿を通して、鉱山労働者の困窮する状況を世の中に伝えた土門の『筑豊のこどもたち』を念頭に置くと、山田も沖縄の子供たちの姿によって、沖縄の現状を描き出そうとしていることがわかる。山田の写真の中の子供たちの多くは、幼いながらも日々の糧を稼ぐために懸命に働いている。そこには戦争によって甚大な被害を受けながら、復興に向けて少しずつ歩みを進める沖縄社会の現実がある。

作家略歴 |

1918年、兵庫県生まれ。2歳のときに一家で那覇に移住し、1936年に第二中学校（現・那覇高等学校）を卒業。1941年、明治大学商科（現・商学部）卒業後、日産土木（現・りんかい日産建設）に入社し、満州に赴任した。現地で召集され従軍。終戦後はシベリア抑留を経て、1952年に沖縄へ帰還し、同年、那覇で写真機店を開業した。1959年、沖縄ニッコールクラブを結成。2002年、『こどもたちのオキナワ 1955–1965』（池宮商会）を刊行。翌年、那覇市民ギャラリーで「時の話 人の譜 街の紋 山田實・写真50年」を開催。2012年、『山田實が見た戦後沖縄』（琉球新報社）、『山田實写真集 故郷は戦場だった』（未来社）を刊行。同年、沖縄県立博物館・美術館で「山田實展 人と時の往来」が開催された。翌年、日本写真協会賞功労賞、第29回写真の町東川賞飛驒野数右衛門賞を受賞。没後の2018年、ニコンプラザ新宿で生誕100年を記念して「山田實写真展 きよら生まれ島—おきなわ」が開催された。

比嘉康雄 | Higa Yasuo [1938–2000]



比嘉康雄 左：《本土集団就職 那覇港》、右：《女性初の国政参加 コザ、山内》
ともに〈生まれ島・沖縄〉より 1970年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵

“93歳になる私の祖母は明治12年、いわゆる廃藩置県で琉球が沖縄県になった年に生まれ、「日本世」「アメリカ世」を生きてきました。1970年初めて国政の選挙権が認められた沖縄で、字の書けない祖母は2日前から練習して、やっと私たちがすゝめる候補者の名前を投票しました”

比嘉康雄『生まれ島・沖縄』東京写真専門学院出版局、1972年、4頁。

沖縄各地で撮影された比嘉の写真には、「今」だけではなく、複数の時間が流れている。1971年に発表した〈生まれ島・沖縄〉と同名の写真集（東京写真専門学院出版局、1972年）には、復帰に向けて揺れ動く沖縄で、日々を懸命に生きる人々の姿が写し出されている。その後、20年の時を経て刊行された新版『生まれ島・沖縄』（ニライ社、1992年）では、旧版で目立ったポートレートではなく、一歩引いた視点で沖縄の「今」を伝えようとしているイメージが大幅に付け加えられた。「復帰する本土日本とはどんなところであろうかと考え、北海道から九州までを縦断することにした」と同書で述べているように、沖縄移民が暮らす大阪の大正区や、米軍基地がある岩国や佐世保で撮影された写真からは、沖縄を離れても、その意識が絶えず「生まれ島」に向けられていることをうかがい知ることができる。

作家略歴 |

1938年、フィリピンで沖縄からの移民の子として生まれる。第二次世界大戦終戦後、家族と共に沖縄に引き揚げ、1958年にコザ市（現・沖縄市）のコザ高等学校を卒業。卒業後は嘉手納警察署に警察官として勤務し、鑑識の業務でカメラを手にする。1968年にアメリカ軍の嘉手納空軍基地で起きたB52爆撃機墜落事故を契機に警察官を辞め、東京写真専門学院（現・東京ビジュアルアーツ）で写真を学んだ。1971年に卒業し、個展「生れ島・沖縄」（銀座ニコンサロン）を開催。翌年、『生れ島・沖縄』（東京写真専門学院出版局）を刊行。1976年、「おんな・神・まつり」で第13回太陽賞を受賞。1979年、『神々の島 沖縄久高島のまつり』（共著、平凡社）、翌年、『琉球弧 女たちの祭』（共著、朝日新聞社）を刊行。1993年、『神々の古層』（全12巻、ニライ社、1989–93年）により日本写真協会賞年度賞を受賞。2000年、『日本人の魂の原郷 沖縄久高島』（集英社新書）を刊行。没後の2001年、那覇市民ギャラリーで「比嘉康雄回顧展 光と風と神々の世界」が開催。2008年、「沖縄・プリズム 1872–2008」（東京国立近代美術館）に出品、2010年には『比嘉康雄写真集 情民』（未来社）が刊行された。2010–11年、「母たちの神—比嘉康雄展」（沖縄県立博物館・美術館、IZU PHOTO MUSEUM）が開催。同展に合わせて『母たちの神—比嘉康雄写真集』（出版舎 Mugen、2010年）が刊行された。

平良孝七 | Taira Koshichi [1939–1994]



平良孝七

《74・8 多良間村水納島》

〈パイヌカジ〉より 1974年

ゼラチン・シルバー・プリント

名護市蔵

“昔からこの島で生まれ、そして死んでいかねばならなかった人たちの生活、それをとりまく自然、風土にもっと目を向ける必要がありはしないか。いわば、背景をもっと素直に撮っていくことからやり直さねば——そんな衝動にかられ、宮古群島と八重山群島の離島僻地にアングルをしぼることにした。”

平良孝七『『パイヌカジ』(南の風)への道程』『アサヒカメラ』1977年4月号、81頁。

『パイヌカジ』* (私家版、1976年)には1970年から1975年にかけて撮影された132点の作品が掲載されている。沖縄本島で撮られた作品は一つもなく、1972年以降に宮古と八重山で撮影された作品が多くを占めている。その場の状況を的確に説明するような復帰闘争の写真に比べると、「背景をもっと素直に撮っていくことからやり直さねば」と平良が述べているように、『パイヌカジ』に掲載された作品は何のてらいもなく離島の風景を切り取っている。

沖縄が日本復帰に沸く中で、平良は依然として厳しい離島の現実に目を向ける。だが、そのまなざしに悲壮感はなく、復帰を経て変わってゆくものと変わらないものを冷静に見定めながら、島々の今を印画紙に刻印してゆく。

* 沖縄の方言で「南風」を意味する

作家略歴 |

1939年、沖縄本島北部の国頭郡大宜味村に生まれる。1958年に辺土名高等学校を卒業後、上京を経て、1962年に辺土名で写真店を開業した。その後、琉球新報写真部、琉球放送テレビ報道部を経て、1970年より琉球政府の広報部に勤務。1972年、琉球政府の閉庁に伴い、沖縄県職員となった。1976年に『平良孝七写真集 パイヌカジ 〈記録 1970年～1975年〉』(私家版)を刊行。翌年、同書により、第2回木村伊兵衛写真賞を受賞した。1982年、『平良孝七写真集 1961年～1981年 沖縄カンカラ三線』(三一書房)を刊行。1986年、写真を担当した『塩屋・ウンガミ 沖縄県大宜味村塩屋ウンガミの記録』(塩屋ウンガミ刊行委員会)が刊行。没後の2002年、「沖縄を見続けた写真家 平良孝七の世界」(名護市民会館ほか)が開催、『太陽と風とカンカラ三線 沖縄を見続けた写真家 平良孝七の世界』(平良孝七写真展実行委員会事務局)が刊行された。2008年には、「沖縄・プリズム 1872-2008」(東京国立近代美術館)に出品された。

伊志嶺隆 | Ishimine Takashi [1945–1993]



伊志嶺隆
《星立》〈光と陰の島〉より 1987年
ゼラチン・シルバー・プリント
東京都写真美術館蔵

“まばゆい光によって照らし出される事物だけではなく、その「陰」の部分まで目を凝らすこと。
「『光と陰』というのはまさに沖縄の風土ですよね。光も強くて。陰も強くて」”

琉球放送「アキラの花の土曜日営業中」（出演：伊志嶺隆、垣花章、玉城美智子）、1988年10月15日放送、録音テープを起こした原稿より、友寄寛子作成。

〈光と陰の島〉は6×6センチ判の正方形のフォーマットで撮影された。閉山した西表炭鉱の遺構を直接的に写したものは少なく、島の祭祀や自然、そこに暮らす人々の姿が主にとらえられている。1985年から1987年にかけて撮影されたこれらの写真の特徴の一つが、光によって織りなされるグラデーションだ。木々のあいだから差し込み、祭祀に集う人々や森の中に横たわる巨石を照らす太陽の光は、明暗をはっきりと分けるのではなく、「陰」の部分も静かに照らし出している。

伊志嶺は「光」と「陰」のどちらも、極端なコントラストで形式化することなく丹念に焼き付け、この島の風土と歴史を印画紙の上に描き出している。

作家略歴 |

1945年、家族の疎開先の台湾で生まれる。翌年、両親の故郷の宮古島に引き揚げ、1950年に一家で那覇市に移住。1965年、那覇商業高等学校を卒業。上京し、印刷会社での勤務を経て、1968年、東京写真専門学校（現・東京ビジュアルアーツ）入学。中退後、日本デザインセンター、高梨豊写真事務所に勤め、1971年にフリーとなり沖縄に戻った。翌年、琉球大学や沖縄大学の写真クラブ有志らと写真集団「ざこ」を結成。1988年、銀座ニコンサロンでの個展「光と陰の島」で、西表炭坑を題材にした作品を発表。1990年には、那覇市民ギャラリーで個展「72年の夏」を開催した。1993年、バイク事故により急逝。翌年、那覇市民ギャラリーで「伊志嶺隆遺作展」が開催。同年、『伊志嶺隆遺作集』（伊志嶺隆遺作集実行委員会）が刊行された。2008年、「沖縄・プリズム 1872-2008」（東京国立近代美術館）に出品、2011年には那覇市民ギャラリーで「伊志嶺隆写真展 島の陰、光の海」が開催された。2012年、『伊志嶺隆写真集 光と陰の島』（未来社）が刊行。2019年、「伊志嶺隆と平敷兼七」（沖縄県立博物館・美術館）が開催された。

平敷 兼七 | Heshiki Kenshichi [1948–2009]



平敷兼七《火葬場 南大東》1970年
ゼラチン・シルバー・プリント
東京都写真美術館蔵

“いま沖縄は基地。私は、その沖縄に昭和二十三年に生まれた。私たち沖縄の青年たちにとって、これらの問題から逃れることはできない。これからの沖縄、ふるさとの沖縄——この写真はごく日常的な沖縄の断片である。”

平敷兼七「故郷の沖縄」『カメラ毎日』1970年3月号、109–116頁。

1970年代初頭は多くの写真家が復帰運動に目を向ける中で、平敷は復帰運動の現場から離れた沖縄各地をめぐる。南大東島の火葬場や宮古島の祭祀、鰹節を加工する与那国島の作業場など、その歩みは周辺の島々にも及んだ。それでも復帰の翌日に沖縄最北の有人島の伊平屋島で撮影した作品には、赤瓦の住宅の軒先に復帰を祝して掲げられた日の丸が写っている。那覇から遠く離れてもそこは同じ沖縄で、人々を取り巻く状況は変わらない。平敷は逡巡しながら沖縄各地で写真を撮り続けることで、「沖縄」をめぐる問題を問い直し続けた。

作家略歴 |

1948年、沖縄本島北部の国頭郡今帰仁村に生まれる。1967年、沖縄工業高等学校を卒業。同年、上京し、東京写真大学（現・東京工芸大学）に入学した。1969年、同校を中退し、東京総合写真専門学校に入学。翌年、『カメラ毎日』3月号で「故郷の沖縄」を発表した。1971年に東京総合写真専門学校を卒業。1985年、嘉納辰彦、石川真生らと写真同人誌『美風』を出版した。1996年、『南灯寮』、『沖縄をすくった女性達』（いずれも私家版）を刊行。2007年、写真集『山羊の肺 沖縄 1968–2005年』（影書房）を刊行。2008年、個展「山羊の肺 沖縄 1968–2005年」（銀座・大阪ニコンサロン）を開催し、同展で第33回伊奈信男賞を受賞した。同年、「沖縄・プリズム 1872–2008」（東京国立近代美術館）に出品。没後の2016年、『父ちゃんは写真家 平敷兼七遺作集』（未来社）が刊行。翌年、「平敷兼七写真展 沖縄、愛しき人よ、時よ」（東京工芸大学写大ギャラリー）が開催。2019年、「伊志嶺隆と平敷兼七」（沖縄県立博物館・美術館）が開催された。

比嘉 豊光 | Higa Toyomitsu [1950-]



比嘉豊光《コザ暴動》〈赤いゴーヤー〉より
1970年 ゼラチン・シルバー・プリント
東京都写真美術館蔵

“沖縄の基地は、日本人の目に異常の風景として映るらしい。が、ぼくにとって基地は日常の風景でしかない。最近、闘争の写真を前ほど撮らなくなった。というのは、白ヘルとか旗とかプラカードの文字だけが全軍労ではない。いまや何を撮っても全軍労になるからだ。”

東松照明、『朱もどろの華一沖縄日記』、三省堂、1976年、89-90頁掲載の比嘉の言葉より。

〈赤いゴーヤー〉は、比嘉が琉球大学在学中の1970年から1972年にかけて撮影された。同時期、沖縄の人々のあいだでアメリカ軍への反発が高まり、その怒りは基地労働者たちのストライキ、そして1970年12月20日未明のコザ暴動へと続いてゆく。アサヒペンタックスを手に入れて間もない比嘉もそうした現場に足を運び、抗議の声を上げる人々と肩を並べながら次々とシャッターを切っていた。

作品の多くは走行中の車の窓から撮影されており、延々と続く米軍基地のフェンス、停留所で路線バスの到着を待つ人々、高く生い茂ったサトウキビ畑、公道を何台も連なって走る軍用車両、米軍基地で働く労働者たちのデモ。〈赤いゴーヤー〉では、比嘉にとって、沖縄の人々にとって、「あたり前の風景」が写されている。比嘉によれば「黄色のゴーヤーの中に真っ赤に熟した果実『赤いゴーヤー』がある」のだという。

作家略歴 |

1950年、沖縄本島中部の中頭郡読谷村に生まれる。1975年、琉球大学法文学部美術工芸科を卒業。翌年、自主ギャラリー「写真広場あーまん」の設立に参加。1977年、「今日の写真・展77」（神奈川県民ホールギャラリー）に出品。1982年、『熱き日々in キャンプハンセン！！』（共著、あーまん出版、1982年）を刊行。1997年、比嘉康雄、村山友江らと「琉球弧を記録する会」を設立。2001年、『光るナナムイの神々』（風土社）を刊行。2003年、山形国際ドキュメンタリー映画祭に《島クトゥバで語る戦世》、《ナナムイ》（いずれも2003年）を出品。翌年、『赤いゴーヤー』（ゆめあーる）を刊行。2007年、復帰35周年沖縄県立美術館開館記念関連イベント「写真0年 沖縄」に参加（北島敬三、浜昇との三人展）。翌年、「沖縄・プリズム 1872-2008」（東京国立近代美術館）に出品。2010年、佐喜眞美術館で個展「骨からの戦世—65年目の沖縄戦 比嘉豊光展」が開催。同年、『骨の戦世』（共編、岩波書店）、2012年、『全軍労・沖縄闘争 比嘉豊光写真集』（出版舎 Mugen）を刊行。2014年、光州ビエンナーレ20周年記念展「甘露—1980年その後」（光州市立美術館）に参加した。

石川 真生 | Ishikawa Mao [1953-]



石川真生〈赤花 アカバナ― 沖縄の女〉より
1975-77年 ゼラチン・シルバー・プリント
東京都写真美術館蔵

“狭い沖縄で開き直って生きている街の女たちが私は好きだ。他人の目を一切気にせずに生きてきた私だが、街での生活は「自由に、やりたいように、自分を信じて生きていこう」と、私をますます世間の目を気にしない開き直る女にした。”

石川真生『Red Flower: The Women of Okinawa/赤花 アカバナ― 沖縄の女』Session Press、2017年

石川は外側からのぞくのではなく、黒人専用バーの店員として内側に入り込み、同世代のアメリカ兵や彼らと交流する女性たちを撮影した。「米兵を撮りたくて」という動機で始まった撮影だが、写真集では女性たちの姿が中心になっている。仲睦まじくアメリカ兵と腕を組み、石川が向けたレンズを見返す女性や、着飾って夜の街を歩く女性たち。夜だけではなく昼間の日常生活の様子も写されていて、アメリカ兵とのあいだに生まれた子供たちがはしゃぐ姿や、女性たちが浜辺で水遊びに興じたり、自室でポーズをとり、自身の体をさらけ出す姿がある。

「赤花」とは沖縄でハイビスカスの花を指し、写真集の表紙はシルクスクリーンで花の色を連想させるあざやかな朱色にプリントされた。朱色の無数の網点が女性の姿を描き出すように、石川の写真はスライ&ザ・ファミリー・ストーンの曲が鳴り響く、1970年代の活気に満ちあふれたコザや金武の町を幻影のように立ち上がらせる。

作家略歴 |

1953年、沖縄本島北部の国頭郡大宜味村に生まれる。1974年、WORKSHOP 写真学校の東松照明教室で学ぶ。1977年、個展「金武の女たち」（ミノルタフォトスペース）を開催。1982年、『熱き日々in キャンプハンセン！！』（共著、あーまん出版、1982年）を刊行。「フィリピン」（那覇市民ギャラリー、1989年）、「港町エレジー」（那覇市民ギャラリー、1990年）、「仲田幸子一行物語」（リウボウホール、1991年）の開催に合わせて、同名の写真集を刊行（いずれも私家版）。2004年、「ノンセクト・ラディカル 現代の写真Ⅲ」（横浜美術館）に参加。2008年、「沖縄・プリズム 1872-2008」（東京国立近代美術館）に出品。2010年、『石川真生写真集 FENCES, OKINAWA』（未来社）を刊行。2013年、横浜市民ギャラリーあざみ野で個展「写真家 石川真生―沖縄を撮る」が開催された。2017年、『Red Flower: The Women of Okinawa/赤花 アカバナ― 沖縄の女』（Session Press）を刊行。2018年、丸木美術館で個展「石川真生 大琉球写真絵巻」が開催。2019年、日本写真協会賞作家賞を受賞した。

公式図録

「TOP コレクション 琉球弧の写真」

本展出品作品図版を全点収録。伊藤貴弘（東京都写真美術館学芸員）による論考のほか、作家解説等。

A4版変形、全264頁、装丁：田中義久

東京都写真美術館発行、価格：3,000円（税抜）

開催概要

展覧会名 [和] TOP コレクション 琉球弧の写真

展覧会名 [英] TOP Collection: Photography in the Ryukyu Islands

主催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

助成 公益財団法人ポーラ美術振興財団

会期 9月29日(火) - 11月23日(月・祝)

会場 東京都写真美術館 3階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話 03-3280-0099 www.topmuseum.jp

開館時間 10:00 - 18:00 ※入館は閉館の30分前まで

休館日 毎週月曜日（ただし11月23日〔月・祝〕は開館）

観覧料 一般 600（480）円／大学・専門学校生 480（380）円／中高生・65歳以上 300（240）円

※（ ）は当館の映画鑑賞券ご提示者 ※各種カード会員割引(各種割引の詳細は当館ホームページをご参照ください。)各種割引の併用はできません。※小学生以下、都内在住・在学の中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料

※10月1日（木・都民の日）は無料

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。広報担当までご連絡ください。

- ・図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
- ・図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 / www.topmuseum.jp

展覧会担当 伊藤 貴弘 t.ito@topmuseum.jp / 石田 哲朗 t.ishida@topmuseum.jp

広報担当 平澤 綾乃 / 池田 良子 / 岡田 なつき press-info@topmuseum.jp

本展は、やむを得ない事情により内容を変更する場合があります。